

『東方』三〇五号より

雲岡石窟寺院研究の新展開

伊藤淳史(京都大学)

中国山西省大同市の西方およそ一五キロ、武州川北岸の崖面に、東西一キロにわたって壮大な雲岡石窟群がひろがる。敦煌、龍門と並ぶ中国三大石窟のひとつとして、また、はるか西域を経て日本を終着点とする仏教文化東漸のあかしとして、その名はひろく知られる。二〇〇一年にはユネスコの世界遺産にも登録された。造営は、北魏文成帝の和平元年(四六〇年)、沙門統(宗務長官)であつた僧曇曜の発願にはじまる。帝室の庇護のもと、以後六〇余年の間に累々と開かれた石窟は、小窟仏龕のたぐいは数しれず、大型窟だけでも四〇あまりにのぼる。その変遷は、最初期の開掘になる「曇曜五窟」、それに続く東方群、洛陽遷都(四九四年)以後の造営である西方群、とおおよそ三期に区分されている。これほどの大規模石窟群であるが、遼・金代の再建を経た後は、荒廃して永らく忘却の彼方へと去っていったらしい。本格的研究のはじまりは、二〇世紀初頭、日本建築史学の祖として知られる伊東忠太による再発見と、その後いくつかの紹介を経てからであつた。

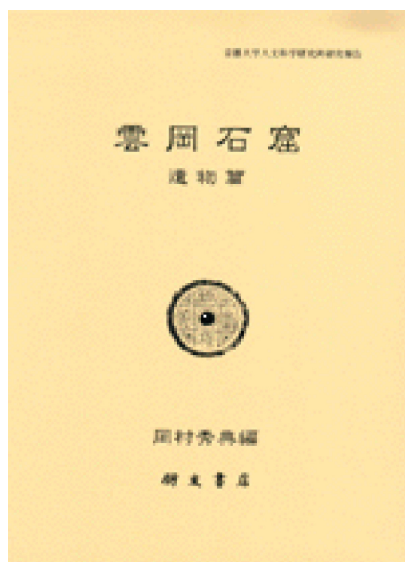
こうしたなか、京都大学人文科学研究所の前身である東方文化研究所は、一九三八〜四四年の七カ年にわたり、石窟とその周辺を綿密に調査した。報告書『雲岡石窟』全一六卷三三冊(水野清一・長廣敏雄著、京都大学人文科学研究所研究報告、一九五一〜五六年)は、魏晉南北朝期の仏教美術研究にとって、もはやこれを越える成果は望めないと言わしめる圧倒的内容を誇り、現在でも必要不可欠な一

トップページにもどる

岡村秀典編

『雲岡石窟 遺物編』(京都大学人文科学研究所研究報告)

B5判・二二三頁・朋友書店・八、四〇〇円



級資料であり続けている。

そして今回、およそ半世紀を経て、私達は新しい『雲岡石窟』の報告書を目にすることとなった。京都大学に保管され未発表のままであつた、遺物の研究報告である。当時の収集資料のうち、美術的価値のあるものは現地で保管され、断片的なもののみが将来されたことから、これまで活用する試みは無かつたという。いわば倉庫に眠る瓦礫であつたわけだけれども、時代・地点とも多岐にわたる興味深い内容をもっていたことが、本書からはわかる。雲岡石窟の繁栄期である北魏・遼金時代の瓦や陶磁器はもとより、石窟前史となる新石器時代や秦漢時代の資料も多数含んでおり、各種の土器・石器類から動物遺存体にいたるまで、つぶさに採集されている。また、地点も石窟にとどまらず、北魏の都であつた平城遺址、孝文帝が造営した方山永固陵、同時代の木造寺院址である西梁廃寺、対岸の西湾瓦窯や東

南四五キロにある西冊田遺址(瓦窯の可能性が高いとされる)など、周辺の多様な性格の重要史蹟におよぶ。当時の調査が、きわめて総合的な視点でおこなわれていたことがよくうかがえ、それが本書の価値を高める底流となっていることは疑いない。

本書の構成は、第一章までが、上述したような地点ごとの遺物の記載に充てられ、最後の第二章に、まとめを兼ねた考察が配される。詳細な記録が残されているとはいえず、調査から六〇年あまりを経て、ほとんどの関係者が鬼籍におられる。当時の所見と実際の遺物との照合にも、さまざまな困難がともなつたであろうと拝察されるが、実にすつきりと編集されている。その最大の学術的意義は、北魏から遼・金代における雲岡石窟について、とくに「寺院」としてのありように焦点を当てながら、事象の年代比定や景観の復元を中心に実証したことにある。これまでは、造像様式など仏教美術史的観点からの議論が主流であつて、そこが宗教的営為の空間で、多くの人々の関与と建造物の存在があつたことは、ともすれば忘れられがちであつた。美術資料としての価値にとどまらない、考古学・建築史・文献史を包括した歴史資料としての雲岡石窟寺院の総合的研究が、本書によっておおきく道を開かれたと言つて良い。五胡十六国の興亡を克服して黄河以北を統一した遊牧民国家北魏は、この壮大な事業をどのようなシステムで遂行していったのか、今後の研究展望への興味は尽きない。

さて、考察部分をもとに、新知見を少し細かく述べておこう。北魏代では、「傳祚無窮」文様の同範瓦を、範の消耗から三段階に区分する作業が基礎となっている。その編年を軸に事象の先後関係を整理し、出土地点の吟味と文献史料との照合をふまえて、暦年代の比定や建物の性格を復

トップページにもどる

元する、という手順で進む。とくに石窟第九・第一〇洞の造営年代については、おもに碑文の記述に拠る四八〇年代説か、美術様式から比定する四七〇年代説かで、ながらく論争が続いてきた。本書は、方山永固陵の造営年代(四八一〜四八四年)、方山遺址と第九・第一〇洞前の第二段階「傳祚無窮」瓦範の共有、四八〇年代には鉗耳慶時(この時期帝室の寵愛のもと芸術と建築に才覚を発揮した宦官)が双方の造営に関与、蓮華文瓦当にみられる古新の様相差、の諸点を総合して、四八〇年代後半と結論づけている。また、景観という点では、遅くとも四七〇年代前半には完成が想定されてきた石窟第八洞前に、第一段階「傳祚無窮」瓦当の出土を確認し、およそこの段階には石窟前に瓦葺き建造物が設けられていたことが判明した。そして、同段階の瓦当が石窟第三洞の上に建設された東部台上寺院址でみつかつており、曇曜がインド僧とともに仏典を翻訳したとする僧院をここに比定するのが妥当としている。当時の僧侶の生活の場は、石窟と離れた台上に設けられていたらしい。

遼・金代では、日常雑器といえる白磁碗など陶磁器資料も加わり、編年と年代観が検討されている。特筆されるのは、資料中に「通樂館置」と墨書された白磁があらたに発見され、雲岡十寺のうち「通樂寺」が雲岡石窟最大の大仏のある第二〇洞前にあつたと判明したことである。そうした成果と、新中国以降の出土品も加えた同範瓦当の地点間での分有関係の把握から、この時代には、石窟前面に複数の木造仏殿の建築・修築がくりかえされ、そこに多くの僧侶が生活していた様相が想定されている。再興された雲岡石窟の景観や僧侶の生活空間は、北魏代とは異なっていたことが実証されたのである。こうした景観復元は、たんに

建造物の築造順や位置比定にとどまらない、空間の機能の変遷にもおよんでいる点で、深い示唆に富む。遺物編ということで、該当地点の配置関係を示す図は全く収録されていないのだが、それがあればより理解が助けられたと感じたのが、唯一残念な点であった。

なお、寺院前史にも考察はおよんでいる。とくに新石器時代については、帰属する文化系統の複雑さが説かれている。雲岡が、石窟開削以前にも、長期にわたるひとびとの活動と交流の舞台であった事実は、選地の背景を考える上できわめて興味深い。雲岡石窟の対岸にある八蘇木地遺址からは、石庖丁や石斧といった農・工具類のほか、陶環や石環などの装身具が未成品も含めて多数出土し、仰韶文化後期から龍山文化にかけてのまとまった内容が注目される。山西省北部地域の資料は、いまだ乏しい現状にあるというが、すでにこの遺址が消滅したと見なされている現況を考慮すると、今回の報告はきわめて高い価値をもつことになろう。

序文によれば、今回の出版は、中国側研究者による雲岡石窟や周辺での発掘調査の進展と、日本考古学における遺物研究の発展といった、日中両国の近年の研究動向をふまえながら、未発表資料を報告して『雲岡石窟』を補完するとともに、考古学から雲岡石窟のあたらしい研究を発信する試みであるという。仏教美術で世界的に著名な雲岡である。そこに、日本の考古学からあらたな成果が加えられることの意義は、はかりしれない。

しかし、本書で用いられている手法は、決して斬新な方法論でも、解釈をめぐる難解な認識論でもない。瓦の詳細な観察から範の異同や範傷の進行を読み取り、編年を策定する作業、製作技術や流通の変化から生産体制の変革を想

トップページにもどる

定し、他の史資料との照合も駆使して、総合的で実証度の高い歴史復元へ向かう過程は、日本の歴史時代考古学においてきわめてオーソドックスな、なじみ深い手法と言つて良い。日本の考古学が、その歩みの中で鍛え熟練させてきた、もつとも地道な作業を基礎としている。

現在、情報や研究成果の国際的な発信を求められるのは、珍しいことでない。日本考古学で言えば、発掘調査と資料の蓄積に熱心であったあまり、世界的な考古学の潮流、とりわけ理論的側面について無関心でたちおくられているという指摘が、しばしばなされてきた。その指摘が誤りであるとは言わない。しかし、世界標準を学んで対応していくことは異なる部分にも、世界に発信するべき多くの仕事はまだまだ残されているのだ、というのが本書から得られた素朴な感銘であった。考古学にかぎらず、ひろく日本の知の営みの諸側面に、同じ状況が忘れられてはいまいかと、恐れる。

最後に付言すると、本書には中文・英文の一二頁におよぶ要約が付されている。そして、多数の現地研究者の協力も得て、大学院生を中心とする新進の研究者たちが編者の指導のもと作成にあたっている。日中間の交流がままならなかった時代が、かつてはあった。しかしこれからは、共通の土俵の上で、あらたな雲岡研究が国際的に築かれていくに違いない。この報告書が、その重要な礎として活用されていくことを願ってやまない。